

Hello

2002

7

No.227

friends

KANAGAWA
INTERNATIONAL
ASSOCIATION
NEWSLETTER

神奈川県国際交流協会は、ことし創立25周年です。

(財)神奈川県国際交流協会 〒247-0007 横浜市栄区小菅ヶ谷1-2-1 神奈川県立地球市民かながわプラザ(あ-355)1階 045-896-2626

特集：多文化子育て

日本で出産や子育てを経験する「外国籍住民」が増え、子育ての現場が変わりつつあります。地域では、保健所主催の外国人ママの会などが開かれたり、日本語ボランティア教室の中には、子育て中の学習者のために、保育のサービスをおこなう団体も多くなりました。保育園や幼稚園でも外国人を親に持つ子どもの保育は増え続けています。

そんな中、アジア出身の女性が「肌の色が黒いのが嫌」で4歳の娘を虐待し、死亡させたと報道されるショッキングな事件も起こっています。「外国人」女性は、子育てのさまざまな場面で、「日本人」を強いられることも少なくありません。子どもを「日本人」にしたいと願わせる圧力はどこから生まれるのか。多様な子どもたちの成長は、わたしたちが、文化や価値観の異なる人間をどう尊重し、他人の子育てをどう支えていけるのかにかかっているのではないのでしょうか。

(財)神奈川県国際交流協会では、昨年度、(特活)地域サポート虹と協働で、「外国籍親子を支援するための研修事業」を行いました。この事業で、「違い」を豊かなものとしてとらえる「多文化子育て」を実践している保育園やグループからいるんなことを学びました。「多文化子育て」は、ありのままの自分を受け入れ、ひとりひとりの子どもを受け入れる子育て。子育てに息苦しさを感じている「日本人」のお母さんにも決して無関係ではありません。今回の特集では、「多文化子育て」を支える現場を紹介し、地域に何が求められているのかを考えます。

外国人ママのわたしは、自分の子どもが日本で孤立して、いじめられたり生きづらくならないよう、「日本人」の考え方や価値観を知ること、そしてそれを自分の子どもに伝えることで精一杯だった。だから“多文化子育て”まで気持ちの余裕がなかったのが本当のところ。子どもたちが学校にあがりたいま、自分の価値観・気持ちを押し殺して「日本」に合わせてきた分、自分がすり減ってしまった危機感がある。こんな状態で何もしなかったら発狂しそう。だから、あちこちの講座を駆け回って自分をうめているところなの。

わたしみたいに、全部まわりが「日本人」で、日本人のお姑さんに仕えていると、自分の文化を肯定される機会がない。わたしが自分の言葉で話せば、お義母さんは、「日本語でやってくれ」になる。一方で、知り合いの米国人女性の場合は、家族もまわりも、「英語を習おう」になる。子どもが小さいときから、彼女は仕事を持っていて、仕事を続けられる協力があって、子どもにも、自分の言葉を、英語を、伝えていつている。

「外国人」と「日本人」が集まって何かをする場はたくさんあるけれど、交流しているというより、こちらが「紹介」をしている気がする。いつもそこで何かを発表するの。わたしは外国の形のある「文化」を見せる側。でも、わたしもこの住人だし、自分がお客さんになるのはごめんだって思う。

わたしのまわりにいる日本人が、「日本ではこうだ」と自分が日本で生きてきた世界の中でしか、ものを見られないときに、「わたしの国では違うよ」と言いたいときがある。それも、「わたしがいままで生きてきた」という括弧つきでだけ。「それとは違ったもの見方もあるよ」って言いたいんだけど、それがなかなか伝わらない。相手が少しも方向転換してくれないと、こっちは辛いなあとと思う。国を出ずに暮らしていたら、わたし自身そういう多数派で、同じようにしたろうから、日本人を責められないんだけど。

みんな違って
みんないい!

ワスナニさんと 考える 「多文化子育て」

マジカルチャイルドクラブは、国際結婚など多文化を家庭にもつ家族たちの自助グループ。自助グループとは、共通の問題を縁にして結ばれた仲間が悩みを分かち合い、より自分らしく生きていくことを支え合うグループのこと。国際結婚のグループの中でも、「こころの問題」を丁寧に取り上げているのが特徴だ。

現在は、国際結婚アノニマス（多文化をもつ女性たちが、プライバシーを守り、夫婦の問題や多文化な子育ての悩みを助言や批判なしにお互いに聴き合う場）や、多文化をもつ子どもの出会いの会（多文化をもつ子どもが自分を好きになることをサポートする会）、メーリングリスト（電子メールを通じた多文化家族の語り合いの場）を中心に活動している。

代表のワスナニ・モニカ・孝子さんは、会の活動のほか、現在、NGOかながわ国際協力会議や息子さんの小学校のPTA活動に忙しい。ワスナニさんに、マジカルチャイルドクラブのこれまでを伺いながら、「多文化子育て」を考えた。

外国人ママ自身が自分らしく 生きることを楽しまなきゃ!

ワスナニさんが会を設立したのは、1993年、長男が1才のときだった。「生まれた息子が日本社会で外国人夫と同じようなつらい思いをしてほしくないという気持ちで、とてつもないエネルギーになりました」。「息子を多文化をもつ仲間とつなげることでエンパワーメントしたい」と会を立ち上げ、さまざまな家族と出会っていくなかで、外国人母子への日本語による日本式育児/同化という社会的プレッシャーに気づいたという。子どもが二つの文化をもつダブルとして個性豊かに育てほしいと、「多文化子育て」を協力し合いたいとつくったグループなのに、多くの外国人女性は日本式育児をしていた。

「まず、外国人ママたち自身が自分らしくいることを楽しめるようにならなければ多文化子育てはできないと考えるようになりました」。外国人ママたちを力づけたいと、子どもたちの前でスターになれる、世界のお料理教室や民族舞踊の会などもよく開いたそうだ。

当事者だけ集まって、 励まし合ってもいいよね?

はじめは、会を誰にでもオープンにし、英語による親子遊びを活動の中心にしていたが、だんだんに日本人親子ばかりが増え、国際結婚当事者が減っていく現実を前に、見直しを迫られた。「いわゆる『交流』は、外国人にとって日本人へのサービスなんだと気づきました。奉仕とは誰もがができるのではなく、自分の問題が解決している人、いろんな意味で余裕のある人にしかできないのかもしれない」。

以後、問題により共感できる当事者が安心して悩みを出せる場づくりを優先するようになった。時として、ボランティアの援助が外国人女性を傷つけたり、自立を妨げるケースもあるのを見てきたワスナニさんは、当事者同士の相互扶助によってみんなが力をつけていくことにこだわり、支援ボランティアの助けをほとんど借りずに活動を続けている。

「対等である」って何だろう?

とはいえ、自助グループの運営は、そう簡単ではなかった。多文化なメンバーがどのように対等にあることができるか? ワスナニさんは、「子育て真っ最中の外国人も含め、どの会員も平等な量や質の仕事を分担できるように」努めていた時期もあったという。しかし、思うようには進まず、人間関係にまつわるトラブルも起こり、「多文化家族のためのコミュニケーション研修」を行うことになった。ワークショップをくり返して、メンバーは自分自身やグループを見つめ直した。結局、皆で決めたのは、「各自ができることをできるだけ行えばいい」というルール。健常者と身障者が「できること」に違いがあっても人間としての価値は対等なのと同様に、「できること」を対等の基準にしなくてもいいと皆が受け入れ、今日に至っている。

多文化子育て - 子どものアイデンティティ

いまを生きる子どもたち。その子どもたちのいまは、親世代とは異なるのが、当

り前。「おとな」と「子ども」も違いを持つ存在だ。「純粋な母文化/親の文化がそのまま継承されるなんて不可能で、子どもたちは自分の意志で、ホスト社会の文化や現代のボーダーレスな世界のなかから、自分の生き方を選びとっていくんだと思う。子ども自身が、『差別』のからくりを見破った上で、本当に自分で何が好きかを自覚して、自分らしさを育て、人生を選びとっていく力を育てていく、そのプロセスを援助することこそが、『多文化な子育て』だと考えています。これって、外国人も日本人も関係ないよね?」

最後に・・・

マジカルチャイルドクラブへは、「自分の子どもに外国人の友人をつくって、子どもを国際人にしたい」という相談が多いそうだ。「それじゃあ、国際人ってどんな人?」とワスナニさんは問いかける。「日本人家族だってそれぞれ多様なはず。あなただけの愛の表現をあなたの身体を通してあなたのお子さんに伝えてください。それが、あなたの家族だけの愛の文化。自分の家族の文化を受けとめた子どもは、多様性を受けとめられる真の地球人に育つのではないかしら」。

連絡先 ワスナニ モニカ 孝子さん
TEL: 045-716-1124
FAX: 045-716-1158
E-mail: magical@zab.att.ne.jp
<http://magical-garden.hoops.ne.jp/>

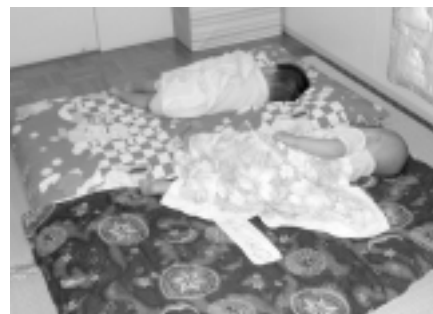


『みんな違ってみんないい!』
～コミュニケーションって何?～

「多文化家族のためのコミュニケーション研修」の記録。ふりがなつき。子育てや人間関係、グループの運営などに悩んでいる人が元気になるヒントがみつまっている。申込みはワスナニさんまで。冊子に同封された振込票で1,000円（送料込み）を振り込み。

「多文化子育て」 を支える場

こんな保育園・ あんなグループ



私立桜本保育園

～民族保育から多文化共生保育へ～

在日コリアンが数多く住む川崎の桜本地区にある桜本保育園の開設は1969年。李仁夏（イ・インハ）前園長の娘さんが国籍を理由に幼稚園に入園できなかったことがきっかけだった。誰でも入れる保育園としてスタートし、5年後には認可保育園となった。当初から、一人ひとりの個性や民族、文化の違いを尊重し、障害のある子を積極的に受け入れ、さまざまな取り組みを実践してきた。それは、生きづらい日本社会で、自らのアイデンティティと生き方を問い続けてきた在日コリアンの深い思いに根ざしている。

はじめは、在日コリアンの子どもが本名を隠すことなく、堂々と自分の文化を誇れるように、日本人の子どもが差別することなく韓国・朝鮮を理解できるようにと民族別の保育を始めた。その後、ベトナム、フィリピン、ブラジル、ペルーなどから渡日したニューカマーの子どもが少しずつ増え、職員で議論しながら、新しいやり方をつくり出していった。まず、園ではそれぞれの文化がわからない。そこで言葉や文化を親から学ぶことを思いつき、保護者を講師に民族別グループで、料理や歌、遊びを習うプログラムをつかった。園では決して口にできなかったブラジル語を先生になった自分のお母さんに習い、元気になった子ども。ささやかな謝礼に「こんなにうれしいお給料をもらったのは、はじめて」というお母さん。そうやって遊びや料理のレシピはストックされ、保育者たちが言う「宝物」は少しずつ増えていっている。同時に日本文化、沖縄やアイヌの文化の素晴らしさも伝えられている。



保育士は、在日コリアンと日本人が半数ずつくらいいるが、数年前から、アルゼンチン人のクリスティーナさんも加わった。南宮（ナムグン）副園長は、「当時とはとにかく通訳をしてもらえればとしか考えていなかったんだけど、そんなことははるかに越えて彼女の存在が園にとって大きい」と言う。ラテンアメリカの園児のことを理解できることももちろんだが、日々の共同作業を通して、新しい園のやり方や文化が生まれているようだ。

園と保護者の間を行き来する連絡ノートの書式は6カ国語版。いま、ここに通う園児に必要な言語で、英語はない。フィリピン人のお母さんへの連絡ノートを見せてもらおうと、日本語ではあるが、保育士の書いたローマ字がびっしりだった。このノート、日本人の親から「今度はスペイン語のが使いたい」という希望も出るとのこと。将来読み返す時に、すぐにペルーの友だちの顔が浮かんできそうだ。

多文化保育といっても、きれいな事ばかりではない。保護者の職場の労働問題、ビザのトラブルなど南宮（ナムグン）さんは、弁護士に相談することを常に抱えている。安心して過ごせる園から巣立っていった子どもたちが、小学校で差別されたと聞けば、学校に話し合いにも出かける。そうしたサポートを行いながら、「自分の色を出していいんだよ」と常に子どもにも、親にも発信し続けている。

連絡先 桜本保育園

川崎市川崎区桜本1-8-22

TEL: 044-288-2545

FAX: 044-288-2546

横浜市立北上飯田保育園

～人と地域をつなぐ保育園～

園児71名のうち、ベトナムの子ども25名、日本21名、中国20名に、ペルー、タイ、フィリピンの子どもたちもいる国際色豊かな公立保育園。園の向かいには、外国籍住民が多く住むいちょう団地がある。

1999年度から、外国籍の子どもたちの方が多い状況が続いている。横浜市には、外

国籍の乳幼児が2割以上いると、アルバイト保育士がひとり増員される制度があり、この保育園にも2名多く保育士が配置されている。現在は、泉区の予算でベトナム語と中国語の通訳者に週1回ずつ半日きてもらい、連絡書類の翻訳と1週間分の連絡の通訳も頼んでいる。通訳者には、入園式、個人面談、遠足、運動会にもつきあってもらったり、子どもたちに歌や遊びを教えてもらうこともある。

保護者にアンケートをとってみると、「自分が日本語で苦労しているから、日本語を早く覚えさせたい」「日本のやり方になじませたい」という希望が多かった。しかし、主任保育士の島田さんは、「乳幼児は日本語も日本の習慣もどンドン覚え、柔軟に共感しあっていく。逆に家族の文化を大事にしてほしい」と母語でのコミュニケーションの大切さも説く。成長して日本語しか話せない子どもと日本語がわからない親との対話の難しさも耳に入ってくる。進学後は、言語環境が学力にも影響するため、「いまは、両方の言葉を経験できる環境を与えたい」。教室には、中国語やベトナム語の張り紙や遊具も目につく。共通語は日本語だが、母語で育ってきた子どもには、職員がカセットテープを聞いて練習した中国語などで声かけをしている。

偏食を受け入れるかどうか、持参する主食をどうするか、文化の違いを調整する必要もある。日本の保育現場では、健康のために薄着を奨励しているが、中国などでは、厚着が一般的で、お母さんは薄着に強い不安を感じているという。「朝は着てきてもらって、少し慣れた時期に『昼間はあたたかいので、汗をかいているときは脱がせていいですか?』と聞いて、夕方はまた着せるようにしたり」。そうやって、お互いの妥協点を探っている。

ベトナム語の通訳に来ているトルオン・ティ・トウイ・チャンさんは、「ベトナムのお母さんたちは、来日直後に出産・育児が始まる人が多い。日本で急に核家族での生活が始まり、相談相手がいなのが悩み」と指摘する。保育園にも、ときどき相談が持ち込まれる。仕事のこと、離婚などの家庭の問題、子どもの障害や病気のこと、家

にきた通知文の内容。そのたびに保育園では、品川の救援センターや医療機関などに相談をしたり、チャンさんの携帯に電話したり。入園説明会には母子手帳を持参してもらって予防接種の説明もしている。警察を呼んで「交通安全教室」を園で開いてもらったり、保健所や小学校、相談機関などと次第にいい連携が図れるようになってきた。

父母会のメンバーも、外国籍の親の方がずっと多い。チャンさんによれば、「父母会活動では、外国人のお母さんは、役員を引き受けたいけれど、日本語がわからないのでお金の計算を間違ったらどうしようと悩んでしまう人が多い。「外国人は面倒なことを人任せにする」という誤解も生じているが、「不安だったら、一緒にやろうよ」と声をかけて応援してくれる日本人のお母さんもいる。去年は、お互いの食文化を教え合おうと、おにぎりや生春巻きをつくりながら、お母さん同士の交流を図った。保育園で知り合い、小学校、中学校とつきあいは続いていく。

違いもさまざまだ。「ベトナムの人たちといっても、ポートピープルとしてきたのか、家族の呼び寄せできたのか、背景はひとりひとり違う。それに『日本人』というくりかたもできません」と島田さん。園では、外国人の子どもたちが多くなって、国籍を超えた子どもや家庭の違い、個別対応の大切さを改めて気づかされたという。

どうしてベトナム、ラオス、カンボジアから難民が来日したのか、中国からの帰国者のこと、そしてさまざまな国や地域の文化と習慣と言葉。ひとつずつ、職員みんな

で学んでいる。夏休みにベトナムや中国を訪ねる人もいるそうだ。

連絡先 横浜市立北上飯田保育園
横浜市泉区上飯田町3053-3
TEL: 045-803-7889
FAX: 045-803-7942

Something Nice

～「ご近所づきあい」をつくる～

横浜市の港南台を中心に、在住外国人との交流イベントや医療支援活動などをおこなっている「国際交流ハーティ港南台」。気がついてみたら、日本語教室の参加者など、関わっている外国人の多くが、小さな子どもを持つ女性だった。「そのうち幼稚園に行けなかった何人かの子どもたちを見ていて、小学校に上がる前に、友人をつかって、集団で遊んだり行動する場をつくりたかった」と代表の小野里さん。外国人のお母さんたちが、同じ立場の日本人のお母さんと知り合って、お互いの文化を理解しながら育児情報を交換する場を支えている。

月に2回、会場を借りて、子育て中の母親と乳幼児を対象に、親子ダンス、英語の歌などを楽しみ、子育ての情報交換ができる場を提供している。プログラムの中身は、地域のつきあいを活かして、布の絵本を借りたり、紙芝居にきてもらったり、よその団体にも声をかけて応援してもらっている。現在は、フィリピン、コロンビア、韓国、ナイジェリア、マレーシア、米国、日本とさまざまなルーツをもつ親子が参加している。



小野里さん自身は、子育て時代に自宅で英語教室を開いていて、大勢の生徒と一緒に自分の子どもを育てた。生徒も、その親たちもいつも家に入り出して、そういう環境が自分の子育てを支えてくれた気がしているそうだ。「今の子育てがすごくしんどそうに見える」と言う。

ハーティ港南台には、子育てに悩む日本人女性もいて、外国人を助けるというよりも、当事者として子育てを支え合う場をつくりたいという声が「Something Nice」という育児サークルの結成につながった。回を重ねてみると、社交的な外国人ママがおとなしい日本人ママを誘って連れてくるケースもある。お古を回したり、子どもを預けることのできる関係も少しずつできてきた。

サポーターとしては、50代以上の孫のいる世代の人たちが関わっている。「要請されなかったら、口は出さない」のが、サポーターたちの約束事。縁の下で子育てを支えながら、若いお母さんたちから毎回エネルギーをもらっているそうだ。

連絡先 小野里純子さん

TEL&FAX: 045-832-0507

「多文化子育て」おすすめ情報

< 本やCD >

『娘に語る人種差別』

タハール・ベン・ジェルーン著、松葉祥一訳。1998年、青土社発行。著者は、モロッコ生まれでフランス在住の有名な文学者。「人種差別の根本的な解決は子どもの教育しかない」と考える著者と10歳の娘との対話。「外国人は、愛情や友情じゃなく、尊重を望んでいる」と説く。

桑山紀彦さんの本

『多文化の処方箋 - 外国人の「こころの悩み」にかかわった、ある精神科医の記録』1999年、アルク発行。『ジェンダーと多文化 - マイノリティを生きるものたち』1997年、明石書店発行など。桑山さんは、精神科医でIVY（国際ボランティアセンター山形）代表。山形で外国人花嫁をはじめとする定住者支援をする一方、東チモール、旧ユーゴなどの海外医療支援にも関わっている。

多文化子どもの歌集「Ciranda Cirandinha 輪になろう」

その国では誰もが知っているような子どもの歌、中国語、スペイン語、韓国・朝鮮語、タガログ語、ポルトガル語の童謡全15曲をおさめたCD。楽譜と歌詞、対訳をのせたブックレットもあり。手遊びの遊び方解説つき。多文化共生センター編。
<http://member.nifty.ne.jp/tabunka/>

< ウェブサイト >

多文化保育園

2001年に「多文化共生センター・ひょうご」が開設。保育士に加え、ブラジル人スタッフや多くのボランティアが関わって運営している。同団体の医療保健プロジェクトとも連携。
<http://www.tabunka.jp/hyogo/>

多文化子育てネットワーク

多文化子育て生活の「実態調査報告書」をサイト上で公開（日本語・英語）しているほか、情報交換の場の提供を目指して、多言語の資料・ガイドも収集。多言語による「日本における多文化子育てガイド」も企画中。
<http://www.tabunkakosodate.net/>

AMDA国際医療情報センター

「外国語の通じる医師・医療機関」「日本の医療・福祉・保険制度」「子どもの予防接種」「ストレスとうまく付き合うためには」などについて多言語で情報提供。7ヶ国語で作成した母子保健ガイド（ビデオ、冊子）もあり。
<http://www.osk.3web.ne.jp/amdack/>

かながわの県市町村発行の多言語情報

市町村によっては、多言語で母子手帳や保育園入所案内、子育てガイドなどを配布している。神奈川県ホームページの「外国籍住民に対応する施策状況」を参照のこと。
<http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/kokusai/seisaku/seisaku.htm>

2002年度の「地域国際化協働プロジェクト」が決まりました。

神奈川県国際交流協会では、昨年度より、「地域の国際化の推進」「地球市民学習」「国際協力活動の担い手の育成」等をテーマとしたイベント、出版、調査研究活動等の企画を公募し、提案団体と“協働”で実施しています。



昨年度の協働事業「ネパールの女性の自立支援のためのチャリティ・イベント『天空』」(提案団体:アジアの風21)より

今年度は、次の2つのプロジェクトを「協働事業」と位置づけて実施することになりました。

日本とネパールの小中学生を対象とした交流のサポート事業「めざせ地球市民！」

(提案団体:アジアの風21)

相模原市内の中学校が、「総合的な学習の時間」を利用して進めようとしている、ネパールの子どもたちとの交流活動をサポートします。神奈川県国際交流協会は、国際理解教育の支援や、交流活動のための各種の情報提供を行います。

子供たちが自ら考える力を身につけるプログラム

(提案団体:地域日本語教育研究会)

外国にルーツを持つ子どもたちが、あるがままの自分を受け入れ、問題を乗り越えていく力をつけるために、「自分は何者なのか」「薬物・性・死」といったことについて深く考えるための連続セミナーを実施します。神奈川県国際交流協会では、セミナーの内容を考えるための情報提供や講師の紹介などの協力をさせていただきます。

「サダコと折り鶴」展

- 時を超えた生命の伝言 -

広島にある平和記念公園内では、いたる所で色鮮やかな折り鶴が見受けられます。折り鶴は日本の伝統的な文化である折り紙の一つですが、今日では平和のシンボルと考えられ、多くの国々で折り鶴が折られています。このように折り鶴が平和と結びつけて考えられるようになったのは、被爆10年後に白血病で亡くなった少女、佐々木禎子さんが大きく関わっています。この企画展では、折り鶴が世界に広まるきっかけとなった佐々木禎子さんの生涯と、サダコと折り鶴の物語がどのように世界に広がっているかを紹介します。あなたも禎子さんの生命の伝言に耳を傾けてみませんか。

この企画展は、広島平和記念資料館の記念事業として2001年7月に開催され、高い関心を集めました。そのなかから写真パネル・説明パネル・現物資料約100点を展示します。

開催期間: 2002年8月1日(木)~9月1日(日)
9:00~17:00 (月曜日休館)

場所: ㊟㊟㊟㊟ 3階 企画展示室

入場料: 無料

主催: 神奈川県立地球市民
かながわプラザ

協力: 広島平和記念資料館

問合せ: 地球市民学習課

045-896-2899



関連イベント

「昭和20年夏の記憶 - 原爆とむしばんと」

被爆者講演と“決戦食”再現

日時: 8月15日(木)

13:00~16:00

会場: ㊟㊟㊟㊟ 1階 会議室

入場料: 無料(申込みは当日会場にて)

地球市民学習リーダーセミナー「まなびの道具箱」スタート

「開発」「環境」「人権」「ジェンダー」「平和」などさまざまな分野を含めた「地球市民学習」の考え方と具体的なノウハウを提供する「まなびの道具箱」が今年も8月から始まります(月1回、全6回)。第3回以降は、「環境教育フィールドワーク」「多文化を考えるワークショップ」「あーすらぎの展示を利用した国際理解教育」などを予定しています。

第1回「時事問題を教室へ」

~英国の開発教育の実践紹介~

(国際協力事業団横浜国際センター共催事業)

9.11事件、アフガニスタン空爆、パレスチナ-イスラエル情勢、緊張するカシミール……。いま、世界各地で起こっていることをどうやって教室でわかちあい、「学び」がしてくれるのか。英国で時事問題の教材化に取り組んでいる専門家をゲストに招いて、授業づくりの視点やポイントを伺います。

とき: 8月8日(木) 13:30~16:30

ところ: ㊟㊟㊟㊟ 5階・映像ホール

講師: キャシー・ミッドウィンターさん(Cathy Midwinter)
「マンチェスター開発教育プロジェクト」スタッフ。中学校教師やカリキュラム開発、教員研修などを含め、約20年間開発教育に従事。現在では、時事問題、国際問題を学校で扱うための教材「グローバル・エクスプレス」の企画・編集を担当。

定員: 100名(申込者多数の場合は抽選)

申込締切: 7月24日(水)

第2回 パレスチナを考えるワークショップ

~メディア・リテラシーの視点から~

とき: 9月14日(土) 15:00~17:30

ところ: ㊟㊟㊟㊟ 1階・ワークショップルーム

進行役: 糟谷幸美さん

パレスチナ子どものキャンペーンのボランティアとして1年間パレスチナ・ガザ地区のろう学校で活動。

定員: 30名(申込者多数の場合は抽選)

申込締切: 8月30日(金)

共通事項

参加費: 無料

申込方法: 参加する回、氏名(ふりがな)、所属(学校名や団体名)、連絡先(電話、FAX、Eメール)をすべて明記して、電話/FAX/Eメールでお申し込みください。ご参加いただけない場合のみ、こちらからご連絡します。

主催: 神奈川県立地球市民かながわプラザ

企画実施: (財)神奈川県国際交流協会

問合せ・企画情報課 TEL:045-896-2896 FAX:045-896-2945

申込先: E-mail:kikaku@k-i-a.or.jp

国際交流・国際協力のための ポスター・作文コンテスト作品募集

地球規模の課題や国際連合に対する関心を高め、国際理解・国際協力の必要性をアピールするためのコンテストです。

ポスターは、「私たちが拓く未来の国連」などをテーマにしたものや「平和」「環境」「人権」「国際理解」「国際協力」などを表現したものとしします。

作文の課題は、「私たちが拓く未来の国連」、「国連に望むこと」、「日本と国連」のうちいずれか一つとしします。作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける作者の研究や体験あるいは実践に基づいて述べたものとしします。

応募資格・作品規格

ポスター

小学生 四つ切(約39cm×54cm)

中学生 四つ切(約39cm×54cm)

高校生 半さい(約54cm×78cm)

一般 半さい(約54cm×78cm)

作文

中学生のみ B4縦書き400字詰原稿用紙4枚以内

締切り：9月13日(金)必着

問合せ：国際協力課

TEL：045-896-2626

E-mail: minsai@k-i-a.or.jp

第12回カナガワピエンナーレ 国際児童画展の作品募集

神奈川県では1979年の国際児童年を契機として、カナガワピエンナーレ国際児童画展を開催しています。この児童画展は、神奈川の子どもたちと世界の子どもたちが絵画を通じてお互いの生活文化の理解を深めることを目的に開催され、今回から当協会が事務局を担うことになりました。

前回第11回展では115ヶ国2地域から42,000点をこえる応募があり、展覧会終了後も県内巡回展や作品集などを通じて多くの方々にご覧いただくことができました。今回下記のとおり第12回展の作品を募集

いたします。要項ご希望等ご関心をお持ちの方はご連絡ください。



第11回大賞 「風」
シリラット・ノントン(15歳・タイ)

応募の条件

応募資格 県内に在住、在学の4歳以上15歳以下の子ども
(2002年4月1日現在。特に国籍は問いません)

画題 自由

画材 水彩、油絵、クレヨン、パス類、版画、はりえ等自由

*取り扱い上こわれやすい凹凸のある造形作品は除きます。

また、画材に、穀物など虫がつきやすいもの、腐る可能性があるものを使用した作品は除きます。

大きさ 四つ切り(54cm×38cm)以内。キャンパスの場合はF8号以下。

出品作品 1人1点*出品者自らの創作によるもので、コンクール等未発表のもの。合作・連作などの共同作品は出品できません。

その他 額縁は使用しないでください。

応募手順

受付期間： 2002年8月1日～10月31日

応募方法： 地球市民学習課へ郵送してください。

*ご持参される場合は、10月22日～31日の平日午前9時～午後4時の間
にお願いします(月曜休館)。

問合せ： 地球市民学習課 TEL：045-896-2899

神奈川県国際交流協会 KIA は

地球のすべての人が、国境や人種、文化の違いを越えて、人間らしく暮らせる社会の実現のため、人と人とのつながりを大切にした「国際交流」「国際協力」を推進するさまざまな事業を展開しています。

あなたも会員になりませんか?

協会の活動を支える会員を募集しています。会員になると

協会が主催する各種催しや国際交流団体、NGOの催し情報、ボランティア情報を掲載した『Hello Friends』『サラダボウル』をお送りします。

会員の方を対象にした催しへご招待します。『エスニック・レストラン・マップ』をお送りします。

会員証の提示で、提携エスニック・レストランの優待サービスが受けられます。

年会費：個人 3,000円から
団体 10,000円から

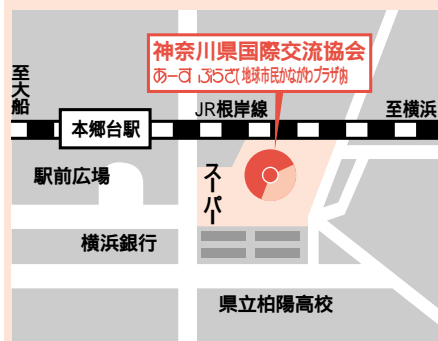
*会員になりたい方は、協会までお問い合わせください。振込用紙など関係資料をお送りします。

協会が運営するあーび 355内の施設の利用時間は下記のとおりです。

情報フォーラム 900～2000
(土曜日曜日祝日 900～1700)

映像ライブラリー 900～1700

*月曜日は休館日です。
(ただし、祝日は開館しています。)



このほか、神奈川県国際研修センターと神奈川国際学生会館を運営しています。

Hello
friends

2002年7月2日発行
第227号

発行 財団法人 神奈川県国際交流協会
〒247-0007

横浜市栄区小菅ケ谷一丁目2番1号
神奈川県立地球市民かながわプラザ1階

045-896-2626 FAX:045-896-2945

URL: http://www.k-i-a.or.jp

E-mail: kikaku@k-i-a.or.jp

印刷 株式会社 佐藤印刷所

「ひとりひとりのお産と育児の本」(平凡社)は、子育てをしながら、たまに手にしてホッとする育児書だ。著者の毛利科子さんは市民活動にも関わる小児科医。この本を含めベストセラーの著書は多い。

「シングルマザーの産後」「障害者の産後」「障害児の育児」-働く人、片親の育児-へのアドバイスにページを割き、子育てにかかわるすべての男女に向けられている。毛利さんは、「医師や専門家のいうことを鵜呑みにしないで、ひとりひとり、自分のやり方」を生活の中から見つけたいよ」と読者を応援し、それを助ける考え方で基礎知識を書いている。

「自分のやり方」は、密室の中からは生まれない。人から押しつけられるものでもない。自分とは違う価値観とぶつかりながら、守り、選り、混ぜ合ひ、つくっていくもの。だろ。今回の特集では、そうした「ひとりひとりの子育て」ができるように力をつけた。紙のアジアンマのつづがやきは、「連れ」を置かえれば、私のつづがやきになる。

話を伺ったグループや保育園が、多様な親や子に会いながら、自ら変わり続けているのが強く印象に残った。どこかの町にぼつんといるアジアンママは、どうやって「自分のやり方」を見つけているだろう。今紹介したのは、ごく一部の現場だが、「多文化子育て」の知恵をもっとたくさんの方やグループと共有できればと思う。

(企画情報課 山内 涼子)

*ヤラシイ・サラシとはかつてのルロートにあった隊商宿。文化・情報の中継点となつて、また、協会職員からのメッセージ発信の場となるよう名付した。

次回の機関紙の発行は9月上旬の予定です。(Hello Friendsは奇数月に発行しています。)